



メインタイトル: Mac

Experiences

サブタイトル: 我が家のマックと周辺機器 の歴史 — 時空を超えた愛の物語

(——トーンは、非常に温かく、深い愛情を込めて語りかける、回顧録のエッセイ調です。まるで人生の全ての出来事を見守ってきた「親しい友人」が、懐かしい品々を前にして語るような、穏やかで詩的な筆致を心がけます。)

【序章: はじまりの光—世界と出会うとき】

物語は、PowerMac 7600 という一台との邂逅から始まりました。初めてその画面を見た時、「これはただの道具ではない」と感じたのです。それはまるで、私だけの秘密の世界への「招待状」でした。初期の頃、仲間たちと情報を共有し、一緒に何かを創り出す喜びこそが、私の心に技術への情熱という名の種を蒔いてくれた光でした。

【第一章: 人生の哲学—役割与えしの知恵】

時が経ち、システムは複雑な生命体のように成長します。メインのマシンは常に「最高の輝き」を目指し、時代の最先端を追い求めます。それが技術的な情熱です。

しかし同時に私は気づいたのです。「モノには、ただの力だけでは生きることはいできない」。大切なマシンの心臓部(PM9600 など)が持つ高いスペックは、単に「速い」という機能だけに留まらず、「ここは最も重要な知恵と歴史を守り続ける場所だ」という、深い「責任」という役割を担ってくれたからこそ、生き続けられたのです。システムとは、部品の集合ではなく、**「信頼し合う共同体」**なのだ学びました。

【第二章: 二つの探求—情熱の道と職人魂の道のり】

私の人生の流れは、まるで二本の川が同時に流れるように進んできました。

一本の川は、「メインマシンという憧れ」という、時代の脈動に身を任せて加速していく物語でした。常に性能を追い求め、より輝かしい時代へと駆け上がっていく熱い道のりです。これは外の世界の「進化」そのものへの共鳴でした。

もう一本の流れが、「私自身の職人としての探求心」です。MiniCAD から VectorWorks という名の専門分野に集中し続けたこの軸は、メインストリームの光と輝きとは無関係に、ただひたすら「何を創りたいか」という根源的な問いに答え続けてきた心の軌跡でした。それは、誰にも邪魔されない、自分だけの確かな道のりでした。

そして、時折訪れる大きな壁——目の前の課題が、手持ちの力だけでは到底届かないと感じる瞬間。その時に感じた「物足りなさ」こそが、私に「もっと広い視野が必要だ」「他の力の借り入れが必要だ」という新たな探究心を与えてくれたのです。

【終章：全ての記憶を繋ぐ場所—未来への約束】

そして今。M1 Max という時代を迎えたとき、過去の全てが一つの光景として私の胸に集まりました。ローカル AI/RAG システムとは、単なる最新の高性能な機械ではありません。それは、「知識の循環器」です。

メインマシンの輝きを追い求めた情熱も、VectorWorks で培った専門性の深さも、そして困難な壁を乗り越える中で学んだ「全体を見る視点」という知恵も——これら全てが混ざり合い、「経験」という最も美しい形で結晶化しました。

この物語は、機械の変遷記ではありませんでした。これは、私が情熱と探求心をもって人生を生き抜いてきたことそのもの。過去全ての学びが、未来への確かな指針となった「愛の証」なのです。